

○井上勝広・鳥羽由紀子・土井謙児
(長崎県総合農林試験場)

【目的】

長崎県におけるトマトの最大産地を対象に、高糖度トマトの割合、収量、売上額等の実態を調査し、一定の売上額を得るのに必要な高糖度トマトの割合と総収量の組み合わせを検討した。併せて高糖度トマト生産のために本県における主要品種の適応性も検討した。

【材料および方法】

1)D農協トマト部会の2002年促成長期どり栽培における冬春トマトの生産販売データを用い、高糖度(8度以上)割合、収量等と売上額との関係を調査した。

2)県内の主要品種「ハウス桃太郎(タキイ)」と「麗容(サカタ)」をpF2.3で管理した場合の商品果収量、糖度等を調査した。

【結果および考察】

1)D農協トマト部会の部会員数は105名、栽培面積は2,852aで、県冬春トマト面積の36%を占め、部会平均は栽培面積29a/戸、収量12t/10a、単価202円/kgであった。

2)糖度別のkg単価は、8度未満に比べ、8度以上では300円以上、10度以上では600円以上の高かった。

3)高糖度トマトが全出荷量に占める割合は平均で約5%であった。また6割の農家が高糖度割合は5%未満で、高糖度割合が20%以上の農家は1割であった。

4)10aあたり売上額は平均240万円で、7割の農家が200万円以上を確保した。10a売上額が300万円以上の農家14戸の出荷量の糖度内訳は、その特徴から収量重視型、糖度重視型、中間型の3タイプに区分できた。

5)高糖度トマトの割合と10a売上額は第1図のとおりで、安定した売上額が期待できるのは高糖度割合10~15%と考える(第1図)。

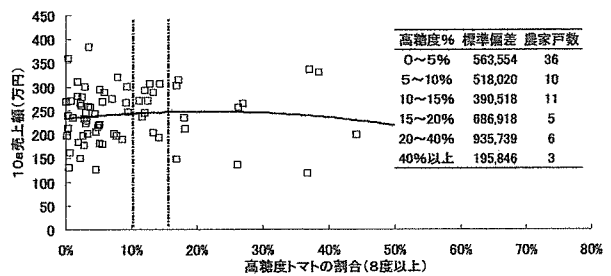
6)収量と10a売上額には正の相関がみられた。

7)高糖度トマトの割合と収量の関係を10a売上額別に農家をグルーピングし、比較した。売上額100~200万円グループは高糖度割合がばらつき収量が低かった。また200万円以上の3グループは概ね高糖度割合20%以内、収量10t以上を確保していた(第2図)。各グループ毎の近似曲線から、売上額250万円を確保するためには高糖度割合5%で収量12t/10a、高糖度割合10%で収量11t/10aを、売上額300万円以上を確保するためには高糖度割合5%で

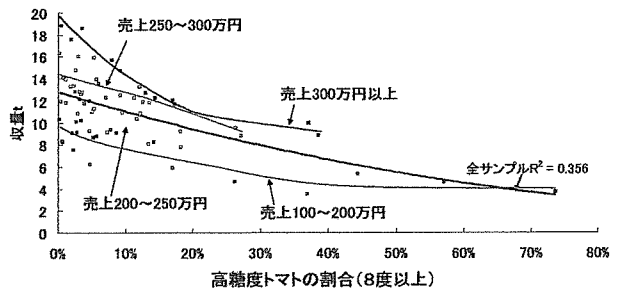
収量16.5t/10a、高糖度割合10%で収量14.5t/10aが必要と試算した(第1表)。

8)県内の主要品種「ハウス桃太郎」と「麗容」の商品果収量と糖度を第2表に示した。促成長期どり栽培(pF2.3で管理)の品種特性として1果重、収量は「麗容」が優れた。糖度は「ハウス桃太郎」が優れた。したがって収量重視型は「麗容」、糖度重視型は「ハウス桃太郎」が適すと考える。

以上の結果から、高糖度ブランドによる販売力強化と、安定した農家収益を確保するためには、高糖度トマト割合を10~15%かつ収量12t/10a以上を目指した栽培が必要である。その際、品種特性を考慮した作付計画が必要である。



第1図 高糖度トマトの割合と10a売上額の関係



第2図 高糖度トマトの割合と収量(10a売上額別)

第1表 目標売上額別の高糖度トマト割合と収量

売上額	高糖度トマトの割合(%)			
	5%	10%	15%	20%
250万円(産地平均)	12t	11t	10t	9t
(目標) 300万円以上	16.5t	14.5t	12.5t	11t

第2表 促成長期どり栽培における商品果収量と糖度

品種名	果数(個)	収量(g/株)	1果重(g)	糖度(Brix)	単収(t/10a)
麗容	54	9,936	184	5.5	18.4
ハウス桃太郎	53	8,056	152	6.0	14.9

注)1850株/10a, 15段摘心, 各段4果に摘果, pF2.3で管理